
異世界は以外と身近でした。

つりめねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界は以外と身近でした。

【NZコード】

N6479Z

【作者名】

つりめねこ

【あらすじ】

いつもの通りの日々を暮らす女子大学生の鈴城 瑠依。

彼女は、いわゆる普通の女子大学生。「魔法やら戦争やら、それはその次元の話しだよ。」

ある日、彼女は日課の古本巡りをしていた。そこにあつた魔法の本、

”封穴のグリモア”。

”空白を埋める者、その名を告げよ・・・” その本に名前を書いた時から、彼女の物語は始まった。

「 そう始まつて、終わつた。・・・はずだつたんだけどなあ？」
＊ 基本的にノリ、で書いている時があります。初心者丸出しな小説
ですが、頑張つて書いていきたいと思います。
只今、FF7の世界に突入中です。しばらくFFの世界だと思いま
す。

プロローグ（前書き）

はじめまして、ついめねこです。 小説は初めてですが、宜しくお願
いします。

よくある異世界トリップで、所々原作沿い、スルー、オリジナル要
素等あります。

つまり、ネタバレもあります。

主觀で書いている点もあるので、そこはご了承ください。
ではでは！

プロローグ

魔法の本、”封穴のグリモア”。
本に書かれた、ある一文・・。 ”空白を埋める者、その名を告げよ・
”

その本に名前を書いた者は、物語をつづらなければならない。

日々の生活、事件、事故、会った人、話した人・・。
そのすべての出来事が本に”生きた証”としてつづられる。
その本が、全部埋まつたその時、”封穴のグリモア”は力を発揮する。

その力は、ある強大な災厄を塞ぐ為の力だった。

その力で、彼はその世界を救つた。

役目を終えた”グリモア”は、彼の手元から姿を消した。
まるで、次の所有者を見つけるように・・。

「”封穴のグリモア”・・。ファンタジー小説かな？」

プロローグ（後書き）

「封穴のグリモア」

FFTA2の主人公が異世界に来たきっかけになつたものです。元の世界に戻る為に、彼は文字をつづつていきました。

この小説の主人公もそのノリで行く予定です。

～序章～ 空印を埋めし者（前編）

旅のきっかけの話しだす。ちよつと長め（細かい）かもしれません
が・・・。

あと、またたりペースで更新します。（キッパリ）

～序章～ 空白を埋めし者

“空白を埋める者、その名を告げよ・・・”
そんなこと書いてあつたらや、以前、書いたやうよね?・・・え?私
だけ?

大学の講義も終わり、いつもの古本屋へ行く。
それが、私。鈴城 瑞依の生活サイクルだった。

特にサークルに入っているわけでもなく、アルバイトもやっている
けど、

まあ・・そこそこ(?)稼いでいる程度という生活をしている。
そこそこのおかげで、いつも赤字ギリギリ。食費を少し削りつつ、
古本屋に通っていた。
友達からは「バカじゃないの!?」と言われるが、これが私の癒し
なんだからしようがないでしょ?

そんなことを考えつつ、目的地に着く。裏路地にあるそこは、
その場所だけ時間が止まっているような、アンティーケな感じ。・・・
・良く言えば。

まあ、ブツ オフとはまた違つた・・・、雰囲気とか、お宝があり
そうな感じが良い。
特に掘り出し物なんかあつたりすると・・・、やめられない。ほら、
これとか。

“封穴のグリモア”・・・ファンタジー小説かな?
見た目の感じでびびつときた。これを買おう。直感つて大切、うん。
「すみません、これ下さい。」
・・・300円。さて、これはアタリかハズレか。

「ただいま」

暗い部屋で、元気良く言つ。

1人暮らしを始めた頃は、何か恥ずかしい気持ちになつたこともありましたなあ。

適当に鞄を置き、癒しの読書タイム。

内容はやはりファンタジーものだった。少年が異世界を旅した物語。所々かすれているため、肝心の少年の名前が分からぬのが残念だった。

「ん？・・・この少年の物語は終わつたのに、まだいっぱいページがある」

ペラペラと何枚かめくるが、何も書かれていないまつさらなページしかない。

むー、ハズレだつたか？と思いつつ、しばらくページをめくる。すると、あるページにこんな一文が書れていた。

「『空白を埋める者よ、その名を告げよ・・・』ね。新しいタイプの小説だなあ。面白い、書いてみるか！」

“その名は鈴城 瑞依” つと

~~~~~

書いたらビックリ、そこは異世界でした。というオチ。

目の前に怪物（ウシみたい）なのがいるし、助けてくれた人（？）も人間じゃなかつた。

ともかくお礼を言つて、事情を話した。要約すると、私は異世界から來たみたいだ、と。

「ありえない」とか言われそうだったのに、何故かすんなりと受け入れてくれた。

“前例があるから”・・・なんだそれ？

私は助けてくれた人物 シドに様々なことを教えてもらつた。  
この世界、イヴァリースのこと、魔法・剣の世界。  
モンスターのこと、そして人間以外の種族がいる、ということ。  
そして、その“本”を知つてはいる、ということ。

その後、“乗りかかつた船”とかでシドがリーダーを務めているガリーケランという、サークルみたいのに入れさせてもらつことが出来た。  
見知らぬ土地では、仲間つて本当に大切だと思ったよ、1人は寂しいし。  
・・・元の世界に帰つたら友達大切にしよう。

それからしばらくは、自分の身を守る為の力、剣・魔法や体力つくりに励みつつ、仕事をこなしていた。  
鍊金術というのにも挑戦してみた。

ン・モウ族という種族にしか出来ないものらしいが、何故か出来た。異世界人の特権つてやつにしておこう。  
あの本、グリモア（今は手帳っぽくなっている）についてもよく知つている人にシドのつてで会つことができた。  
分かったのは、

- ・災厄の為に作られたものだつたが、今はその心配はない。
- ・その本は、人の生きた証を字にして、満杯になつたときその力を發揮する。

その力で異世界に渡る事も可能だ、ということ。

あと、何で鍊金術を使えたか、については私が“優れし者”だから、らしい。

ちなみに、能力は「縁」。うん、抽象的過ぎて分からぬ。

その後は、ふーんつて感じで聞いていたので詳しくは覚えていない（駄目だろう）が、

とりあえず技の継承つてのだけ済ませた。同じクランにいたアーデルも優れし者だつたとはなあ・。

そんな日々を過ごして、手帳いっぱいに文字が埋まり、感動のお別れ。

いざ、我が家へ！

・・・と、思つてたのに。

「次の世界も異世界だなんて聞いてない！！！」

確かに、元の世界に戻れる。とは言つてなかつたけどさあーー！

## （序章） 空白を埋めし者（後書き）

ちょこつとメモ。

鈴城 瑠依・女子大学生の21歳。1人暮らし。

シド・ガリークランのリーダー。種族はバンガ族  
面倒見がとてもよい人。

アデル・ガリークランの一員。種族はヒュム族（いわゆる人間）  
自由気まま、世界でも稀な”優れし者”

優れし者・様々な種族の混血により、時たま能力の突出した人間が  
出てくる。

その能力は様々だが、普通より強いチカラを持っている  
為、

優れし者と呼ばれるようになった。

指摘・感想等ありましたら、宜しくお願ひします。  
しかし、文にするのは難しいです；；

## （第一章）最終幻想の世界・異（前書き）

やつと他の世界に行けました。

（注意！）

\* 勝手な解釈をしています。

\* DCはよく知りてないです、原作を軽くスルー・・・かも。

## （第一章）最終幻想の世界・異

「……ふう」「

以上、回想といつも現実逃避でした。

「帰れると思つたんだけどなあ・・・、また異世界。かあ。」  
きょろきょろと辺りを見渡す。「ゴシゴシとした岩がむき出しの、茶  
色い光景が広がる。

「・・さて、いつまでも呆けてられないね。まずは・・ファイア！」  
頭の中で呪文を思い浮かべ、手に魔力を込める。するとポッと火が  
ついた。

なるほど、ここは魔法が使える世界っぽい。

余談だが、魔法には2つの使用方法がある。

1つ目は、大気中に漂うマナを使った方法。  
マナを束ねて、魔法を使う祭の燃料とするのだ。

2つ目は、自身の力を使う方法。

自身にマナの代わりとなる、生命エネルギーを使うのである。

余談終了。

「マナがある世界っぽいね、自分のエネルギー使っていいないし。」  
異世界に行つたときの注意点。

その1、あわてない

その2、目立たない（異質なことをしない）

その3、仲間を作るべし

これは、前回の異世界で学んだことだ。とりあえず、パーティクにな  
ればなるほど、

周りから白い目で見られる。ここは冷静に・・・

「まずは、人を探そう」

きよろきよろと見渡しながら歩く。方角はコインで決めた。

「ん？ あれは・・剣かな？」

適当に歩いていたと、茶色い地面に剣がぐつたり。

「向か……寂……」=感”。向で“寂”。……ああ、心つか。

岩、砂、砂。

自然が少ないんだ。

よつし、何か明るくなれるよーに。

人の気配・・・特に無し！

頭の中に呪文を浮かべ、魔力を溜める。そして、両手をそつと地面につけた。

~~~~~

エンジンの音を大きくさせながら、俺はバイクを走らせていた。

今田はある村、あの事件以降に出来た村への荷物運びの仕事だった。

メテオ災厄、セフィロスの復活、その後も色々なことがあつたが、やつと平和になつた。

今たモンアターヤ 溢れ出たテイテヒーローで事件や事故が起きるが、

以前に比べたらまだマシ、だろう。
荒野を走りながら、クラウドはそう考えた。

少し高い場所で、休息を取る。

「JRからバスでガルまでは、最高速度を出せば2時間あたりで着く。」

その場所へ行く途中、旅人とすれ違つた。

普段なら特に気にしないが、その旅人が妙に記憶に残つたのは、多分

「 · · · ? 花 · · ? 」

荒れた土地にある、地面に刺さつた“友”的の剣。

剣の場所に別れを告げて、人を探す。

（第一章）最終幻想の世界・異（後書き）

まだ対面させる予定は無い！（え
周り道をしつつ、進んでいきます。

～第一章～ 最終幻想の世界・縁（前書き）

クリスマス・イブ？ バイトです。本当に有難うございました。

オリジナル人物が出来ます、しばらくは原作キャラは出でこない気がします。

気がするだけなので、変わる可能性もありますが・・・（えでは、どうぞ！

* 「ブルヘイム」と「ミッドガル」を勘違いしていました。
うわあ、失敗したー！ ということで、変更しています。すみません！

現状報告、人を見つけることが出来ました。

うん、とつあえずは・・ね。

あれは、いわゆる襲撃されているとこいつ状態だと思つんだけど・・・。
「普通、商品ぞ鬪つぬーー！」

男は自分の行いを悔いていた。あまりにも軽率だつたと。モンスターや盗賊が出現する区域だったが、武装トラックに乗つていたため

あまり危機感を持っていなかつたが、肝心のトラックが故障してしまい

動けなくなってしまった

たいした損傷では無い。すぐに修理すれば動くだろう。だがその時、背後には商品を狙つた盗賊団がいたのだ。

「殺せ。」

冷たく呟く声に気がつけたのは、まだ俺は運がよかつたのかもしない。

や」と見て10人程度、まだ囲まれてはいない

イル) を

大きく振りまわす。・・が、効果はやはり、ない。

男がそう考えていた時、1人の盜賊が肩から血を出しながら倒れた。はつとしてそちらを見ると、黒髪の少女がこちらを見ていた。

たつた一言、「手伝います。」と彼女は言った。

「見過（こ）せない」というお節介と“情報収集　！！”という気持ちがあつたのもあり、

私は一目散に襲撃現場に向かつた。

まず、盗賊2人（岩陰に隠れていた）を愛刀（牡丹という）で、左を刺す。

寸分の違ひ無く心臓を突き刺し、捻つて抜き、絶命させる。以前の私だったら失神するぐらいの血の量と感触を残しつつ、次の目標に狙いをつける。

残り10人、手には皆ナイフや剣を持っている。銃持ちはいないようだ。

襲われている男の人も、この状況に混乱はしていないようだった。ならば、大きく出てもいいかもしない。

集団の中で一番体格のよい盗賊を、後ろから右肩から切り倒す。

襲われていた男と目が合い、「手伝います。」と自分が敵でないことを伝える。

「誰」と叫ぶナイフ盗賊を突き飛ばし、迫り来る盗賊どもに備え陣形を取る。

イヴァリースで習得した、範囲技。

「波動撃！」

「いや、本当に助かつたぜ、嬢ちゃん。俺はラクルス。商品の運び屋だ。」

「いえいえ、私はルイ・ズズシロです。・・旅人です。」
男の人は“ラクルス”というらしい。褐色の肌にムキムキの筋肉。豪快そうな人だった。

「旅人か、腕つぶしが強いのも納得だな。」そう言ってラクルスは横目をやる。

ラクルスの隣には、アクセサリー（ネックレス）とマテリアが置いてある。

これは、盗賊から貰つたもの（奪つたもの？）だ。
ルイは盗賊を1人だけ残し、後は全滅させた。

盗賊団が奪つてきた物を全部出させてから逃がした。その戦利品だ。
「おかげで商品も無事だし、なにより命が助かつたぜ。気持ちだ、受け取つてくれ」

そういうマテリアを差し出す、青いそれは光を浴びてキラキラしている。

ルイにはマテリアが何か分かつていない。が、とりあえず貰つておくことにした。

「えつと、有難うございます。大切にします。あ、あの」
ルイは一番聞きたかつた情報を聞き出す為、会話を続ける。

「商品を運んでいるつてことは、近くに街があるつてことですか？」
「ああ、ミッドガルがあるぜ。ここからだと・・徒歩だとちつと掛かるが」

「ミッドガル！・・良かつた、方角あつていたんだー。」

「ルイさん、あんたミッドガルに行く予定だったのか？」

「ええ、途中道に迷つてしまつて・・・。うろうろしていたんですよ」

「そうだったのか、ここは目印が少ないからな・・・。」

「確かに・・・。あの良かつたらミッドガルまでの道を教えてくれませんか？」

「ああ、いいぜ。つつても、基本的に道なりに行けばなんとかなるがな」

ラクルスさんは、ミッドガルまでの道のりを書いた地図、そして何と！

紹介状まで書いてくれました！

旅人にとってありがたい物ですよ・・・。有難うございますっ！

旅人なら路銀を稼ぐのに重宝するだろ？、ということで貰つた紹介状は、

ラクルスさんが入つている組合みたいなもの、（W.R.Oと書ひがじい）で

仕事が貰える紹介状だつた。本当に有難い！

あと、この青い宝石・・マテリアって言つていたけど、何だ？

あとでさりげなく聞こう。

さて、先ほどの会話で、

1、ミッドガルという街がある。そこまでは徒歩では遠い。

2、目印が少ない＝その街近くに村や集落は無い。

と、いうことが分かつた。武装トラックで移動する辺り、あまりこの世界の人は外に出ないのかもしれない。

と、いうことが分かつた。

「もちろんミッドガル、という場所をルイは知らない。が、あえて知つていいようにした。」

「相手の常識に合わせて話す。」知らないことは、後で調べる。感の良い人には不審に思われるが・・・、その時は正直に話す。結局、他人なので深くつっこまれることは少ないので。

「ミッドガル・・か、どんな街なんだろ?・・・」
「ミッドガル・・か、どんな街なんだろ?・・・」
「ミッドガル・・か、どんな街なんだろ?・・・」

ちなみに故郷とは、元の世界、日本のことである。
日本ではトラックやバイク・車は当たり前に闊歩している。が、異世界だとやはり事情は違つらしい。

「イヴァーリースは故郷より進んでたつぽいなあ。でも、やつぱり!・
「ミッドガル・・か、どんな街なんだろ?・・・」
「ミッドガル・・か、どんな街なんだろ?・・・」
「ミッドガル・・か、どんな街なんだろ?・・・」

「・・・・・チヨコボ?」

これが、彼の第一印象だったといふことは、口が裂けても言えないだろう。

（第二章）最終幻想の世界・縁（後書き）

ちょこっとメモ。

鈴城 瑞依 ルイ・スズシロ。

武器；刀 牡丹 黒塗りの刀。牡丹の絵が彫つてある。
技；波動撃 剣や刀・拳等の衝撃波を自分中心に放つ技。

ラクルス；商品の運搬屋。豪快な印象を持たせる。

～第三章～ 最終幻想の世界・旅人（前書き）

メリー・クリスマス。

イブの方が盛り上がるは何故でしょつかね。

FF7のモンスターは攻略サイトの情報で勝手に造っています。
そのモンスターそんな外見じゃないよっ！とか
そんなモンスターでないしつとかあるとは思いますが、
生暖かい目で見逃してください・・。

（第二章）最終幻想の世界・旅人

襲い掛かるモンスターを蹴り飛ばし、魔法の詠唱をする。蹴り飛ばしたモンスターが体制を立て直し、またこちらへ飛びかかる、

ルイは、魔法を刀に注ぐ。一瞬だけ、刀身が青く光る。

「奥義・凍滅」

身を切るような冷気と、鋭い切っ先がモンスターを襲つた。

ミッドガルまで行く途中、何度もモンスターや盗賊に襲われた。犬（ウルフ、とする）や蛙（紫色だった、気持ち悪い）なら、皮やツメ等を切り取り、

鍊金術をかける。世界が違うので上手くいかないことがあると思い、まずは成分から調べようと思つたのと、お金に換える。

盗賊は、適当にあしらつて戦利品を貰つ。

この前みたいに全滅させてもいいのだが、特に理由がない（襲われていらない）ので

ある程度、怖い思いをさせて逃がした。もちろん貰うものは貰つて。

そのおかげか、持ち運び用の袋は一杯になつた。

物々交換ぐらいは出来るだろうか、トルイは考えた。

“元・魔晄都市”のミッドガルでは、あらゆる人がいた。

ある者は、自身の家族の為に日々を一生懸命働いていた。ある者は、一生懸命に働く人の為に温かいスープを提供していた。ある者は、一生懸命働いた人から金銭を奪っていた。

ほぼ毎日同じような日々が続きながらも、人々は生きていた。しかし、その同じような日々にも変化が生じてきた。

懸命に働いていた者は人を指導する立場になった。スープを提供していた者は「もつと世界の人々に支援の和を」という理想を掲げ、大きな組織を作った。

盗みを働いていた者は金銭だけでなく人の命も奪うようになった。その枠に囚われない者も存在してきた。

旅人の存在である。

彼らは、一箇所に留まらない。そのため戸籍を持たない。

移民とも違い、商人のように外に出て、その商人よりも自由に行動する。

働いたり、提供したり、奪つたりと様々な事が出来る存在である。

彼らは時に感謝され、時に恨まれる存在であったが、多くの者たちの憧れではあった。

が現実は厳しく、志^じどうこうよりも実力や行動力、さらには運といつたものが重なり、憧^{うなが}は“憧れ”の存在のまま。という人は多い。ゆえに、元々ミッドガルに住んでいる人にとって、外を知っている旅人を

もてなすことは一種の自慢である。そして宿屋や料理店が出てき

た。

また、他所では旅人に仕事を紹介する専門店も出来たようだ。
仕事に関してはW.R.Oも仕事を提供しているが、あれはどうちらかといふとボランティアに近い。

また、内容はピンからキリまで。もちろん報酬は高い方が良いだろうが、
信用が足りない旅人に回される仕事は少ないだろう。
それでも、旅人が必要とされているのは、やはりあらゆるスキルを
持っているからだろう。

そんな旅人に憧れていた男、アルドラ・キラエスは今日も人があり
来ない宿屋で、

今日も仕事をサボっていた。

旅人以外に宿屋に泊まる人は、近くに職場があるから、とか
家が無いからとかそういう理由が多い。その為何ヶ月も泊まつて
いるお客様もいる。

つまり、同じような人が同じような事をしている。ゆえに仕事内容
も変わらない。

実に、刺激も何も無く・・・暇、である。

しかしそこに、短い黒髪を一つに縛った、少女がやってきた。
滅多に来ない異質に、アルドラは慌てて仕事に戻る。

「い、いらっしゃいませ、宿屋『冒険王』にようこそ。」

「カードが無い・・?といふことは旅人さんですかっ!? 警官の格好をした女性の、響き渡るような声にルイは驚く。その原因は、少し時間をさかのぼることになる。

ガランとした雰囲気を漂わせる荒野と、目の前にはどおんという効果音が聞こえそうな門がある。

機械の声で“カードを提示しろ”と言われ困り、面倒・・と思いつつ、近くにいた人に話しかけたらこうなった。かなり面倒なヨカン。

「・・・もしかして旅人は街に入つては駄目なのですか?」「あ、すみません。つい興奮してしまつて・・。いえいえ、大歓迎です。

どうぞ、こちらのカードをお使いください。街から出る時や入る時に必要なだけでなく、このカードで街のあらゆる機関や仕事に必要になりますので失くさないでくださいね。」

女警官から貰つたカードは、青いものに赤の線が一本入つたものだつた。

どつかの銀行のカードみたいだ、ヒルイは思つ。

「ありがとうございます。「あ、あのつ・・・何ですか?」急にもぞもぞとし始めた女警官に、警戒を一応する。

「……握手させてくれませんか？一度だけ！お願ひします……」

・・・・旅人である、とは言わぬ方が良さそうだ。

* * * * *

その後、商店街（といひより市場みたいだ）を周り、物々交換をした。

ウルフ（犬）のツメや蛙の皮は数があったので、そこそこの値段で売れた。

「300ギルです。」まさか、ここでもギルという通貨を聞くとは思わなかつた。

合計1000ギル。マテリア宝石を売れば・・とも思つたがなんとなく、辞めた。

安い宿屋なら何とか一泊は出来そうだ。

地理なんか分からないので、適当に歩いて宿屋を探す。

「『冒険王』ね、ここじょうかな

宿屋に入ると、同一年ぐらいの青年がいた。

「すみません、宿泊したいのですが・・、一泊おいくらですか？」

「宿泊ですね、えっと・・・一泊200ギルです。」

・・・安いのだろうか、高いのだろうか。それすら分からぬ。
うーん・・・と考えていると、料金に悩んでいると思つたのか、青年
が慌てながら

「・・・ですが！1週間単位のご宿泊をされるのであれば、さらにお
安く！900ギルで

ご提供できます。いかがですか？」と言つた。

500ギルのお得。魅力的な金額だつた。少しボ・・古風だが、ま
あ、いいか。

「じゃあ、とりあえず1週間でお願いします。」

かなり寒くなつたサイフを見て、明日やること考える。

まず、お金と仕事をなんとかしよう。W.R.Oの紹介状を持っている
から、そういう機関にいけば、なんとかなるかもしね。あと、情報収集。物々交換の祭に、お金じゃなくマテリアじや駄目
か、と宝石を出されたのだ。マテリア宝石が何なのか分からなかつたので、
断つたのだ。

このマテリアはただの宝物じゃないらしい。

ラクルスさんがわざわざくれたぐらいだから、何か旅人に役に立つ
物なのかもしね。

知つておく必要はありそうだ。

あまり広くないが、妙に落ち着く狭さの部屋でルイは朝まで眠つた。

ちなみに、朝起きたら床に落ちてた。
うーん・・・、あいかわらず癖は治らないようだ。

（第三章）最終幻想の世界・旅人（後書き）

ちょこつとメモ。

技・奥儀・凍滅 氷の剣で連続攻撃し、さらに「スロウ」をひきおこす技。

氷の魔法が必要。

アルドラ・キラエス・旅人に憧れていた宿屋の店主。25歳。
見た目は若く見える。

アドバイス、感想は隨時求めています（。・・）ノ

～第四章～ 最終幻想の世界・前兆（前書き）

一つの世界の話しが終わるのにかなり時間が掛かりそう。
と、思いつつ話が膨らんでいきます（笑）

ちなみに、このFFFは、AC後のつもりです。
が、あくまで”つもり”なので、若干違います。

どのくらいの文字数が読みやすいのか、いつも悩みつつ書いています。

・・・短いですかね？

ミヅダガルの朝は、清々しい朝というよりかは騒々しい朝になることが多い。

魔晄エネルギーから石油エネルギーに代わり、ボイラーガ朝早くから動いているのだ。

その音が命懸かのようになり、一斉に人が動き出し始める。

寝た時より幾分か低い目線で目が覚める。

背中に少し痛みを感じながら、ルイは体を起こす。ボオーと、けたたましい音が鳴った。

屋上で買ったホットエンド（元）を食べ、近いもの）を教えてもらひ、ちらつたWROへ行く。

宿屋の店主によれば、W.R.のはこの街の経済・流通といった政策から、食堂・ボランティア活動等の幅広い事業を展開しているらしい。比較的簡単な仕事も提供しているらしい。

簡単な仕事なら異世界人の私でも出来るかもしねえ。

~~~~~

“アドミニシクシザーを2つ集める”

この世界での仕事は、まず物探しから始まった。

スイーパーカスタムというモンスター（機械？）から、取れるらしい。

そのモンスターは、機械のような体でお目当ての物はその一部みた

10

が、最近はめつきり数を減らしたらしく、倒してゲットーといつよい動かなくなつた機械から回収する、に近い氣がする。

ルイはスパナを手に最後のアドミックシザーを取りつつ、そんな感想を持った。

「これで報酬300ギル。見つけるのが難しいぐらいで、後の作業は簡単だつたなあ。

「一つ・・二つ。確かに受け取りました。こちらが報酬です、有難うございました。」

ペコリ、と事務係っぽい女性が頭を下げた。オッドアイが印象的な女性だつた。

その後、あるモンスターの体液の採取（何かの燃料になるらしい）や、「ちょっとそこまでこの荷物運んでよ！」みたいな仕事を沢山した。

合計1200ギルの稼ぎ。それを元手に、装備を新調することにした。

~~~~~  
商店街っぽい所につき、ルイはまず「マテリアあります」という看板がある雑貨店に向かつた。

店内には、マテリアの他に雑誌や素材が置いてある。

“旅人を目指す貴方へ！これを知つておくべし！”といつうたい文句が書かれた雑誌をルイは手に取り、読んで見る。

そこには、「今更聞けないマテリア基礎知識上・下」「絶賛！これを持てば貴方も“一流”と書かれてあつた。

“マテリアとは、魔晄が凝縮され生み出された結晶であり、古代種の知識が蓄積されているとされ、これを介すれば一般の人間でも様々な魔法や戦闘技術を使用する事ができる。自然界では天然のマテリア

ライフストーム

テリアが存在するが、魔晄の豊富な土地でしか発見されず、またそのような土地が非常に少ないためこのマテリアが発見されるのは稀である。そのため一般に出回っているマテリアは魔晄炉の中などで人工的に生成されたものが殆どである。マテリアに秘められた知識や能力は多種多様で、攻撃や回復魔法、特殊な戦闘技術の付与や支援、中には強大な力を秘めた召喚獣を呼び出す物もあり、従来の兵器を遥かに超える力を持つ物が多数存在していた。中でも魔晄炉の中心で直接生成されるヒュージマテリアは通常のマテリアより巨大である分、何百倍ものエネルギーを有しており、魔晄キヤノンなどの巨大兵器に用いられていた。」

ふむふむ、とコンビニの立ち読み感覚で読んではいるが、店主が話しかけてきた。

「その雑誌、ちと古いから気をつけなよ。今じゃマテリアは日常品さ。私らみたいな小さい雑貨店でも置けるもんだ。ま、天然物やマスター・マテリアなら話しあ違うがね。」

「マスター・マテリア? それってどういう物でしたつけ?」

「マスター・マテリアは、マテリアの知識を最大限に持ったものさ。・例えば“ほのお”なら、一番簡単な魔法“ファイア”から上位魔法の“ファイガ”までの術が使えて、なおかつ“詠唱時間が最短のもの”さ。」

「へえ・・・じゃあ、マスター・マテリアはとても希少な物、ですね。」

「ま、育てればどれもマスター・マテリアになる可能性はあるがな、じゃが、時間が掛かりすぎてのう・・・。商売にはならんよ。」

やれやれ、という風に肩を竦ませおばあちゃん店主は店の奥に消えていった。

「使い込めば、使い込む程強くなる。つてことかな? なら買って損はなさそう。」

この店にあるのは、 “かいふく” “ほのほ” “れいき” “いかづち” の4つの大小異なるマテリア。

ルイは一つを手に持つてみた。紅い色がゆらゆらと『』る。

“ 威力を求める方はこちらを！” というポップが貼つてある。

「メリット・デメリットが分からぬいや・・・。」

ルイの戦闘スタイルは、刀を使った“奥義”、そして“エアレス”という優れし者だけが使える技をしている。前者は素早さと威力が高く、後者は少々トリッキーな技（武器からエネルギーを直線に放つ、レナート。モンスターを一時的に従えさせるラディスク等）が多いのが特徴だ。

魔法は基本的に奥義を使う時にしか使わないことが多いルイにとって、武器と相性が良いマテリアを探さなければならない。

“ 奥義を使う祭は、魔法を刀に宿す。” つまり・・・

「 術が早く発生して、なおかつ正確なもの・・・ついでに言うのなら、マナをあまり消費しないのがいいな。」

結局、あの店ではマテリアを買わなかつた。

条件に合うマテリアが無かつたのと、 “マテリアは装着して使う” という情報をあの店主から聞いたから。

当然、私の刀にはマテリアを装着する場所？は無い。鍛冶屋とかに行けば何となるかな？と考えて、今、加工して貰つている最中。あと、ラクルスさんから貰つたマテリアはちょっと変わったマテリアだつた。

“ りだつ” というマテリアだけど、何か・・・個性？があるらしく “モンスターに使うものではない” らしいのだ。

次元を変化させて、モンスターをぽいつとしてしまう魔法“デジヨン”、それをモンスター以外で使う・・・物をしまつたり、出した

り出来る四次元ポーツみたいなもの?と思い、鍊金釜(折りたたみ式)を出したりしまつたりしてみた。これ凄く便利。大切にしよう。

カーンカーン、という音が止まった。

「出来たぜ、しかしいい刀えもの使つているな。・・・ほれ」

渡された刀には、3箇所の穴が開いている。

「有難う御座います。加工代はいくらですか?」

「1000ギル。というところだが・・・、一つ相談がある。」

「?何でしようか??」

「ね、眠い・・・、体力限界だよ・・・。」

その後、「その刀で闘う姿を見たい」と言われ、ひたすらモンスターと闘つていました。

もう・・・、何か一種の修行ですか!?という感じだった。宿屋につけ、ベットにダイブする。軽く鼻を打つた気がするが、眠気がそれどこのりじゃないくらい、凄い。

次々と襲つてくるモンスターに対し、ルイが奥義を使ったのがまづかった。

見事な技に、鍛冶屋の店主が惚れてしまい、「他の技も見せてくれつ!」と目をキラキラさせて、催促してきたのである。

だが、おかげで加工代は無料、なおかつ「これも使ってくれい!技編み出したらまた見せてくれ!」と、パースエイダーを貰つた。マシンガンとは違い、一回一回銃弾を入れて撃つタイプの物であつたが、以前の世界で

“パースエイダーは、連射は出来ないかわりに、一撃が強力!クボツ!”と、銃使いのモーグリが愛用の銃を撫でながら言つていた。乱戦には向かないが、1対1の時や防御の高いモンスターには効き

そうな代物だった。

「……故郷にあつたら逮捕されそうな物ばかり持つてゐるな、
私。」

生きていく為とはいへ“普通”なら絶対触らないであつたそれらを
眺めつつ、ルイは眠りについた。

夜、グリモアは一瞬光を灯し……。そして消える。

そのページは真っ白だった。

～第四章～ 最終幻想の世界・前兆（後書き）

ちゅうじゅとメモ。

パースエイダー・ピースキーパーといつ名前の銃。一弾一弾が強力。おばあちゃんでもマテリアハウツーを知っている世界になっています。イメージとしては、コンロに火のマテリアが埋まっているような日常（え

～第五章～ 最終幻想の世界・吉兆（前書き）

オリキヤラの名前は、思いつき〇〇適当にキーボードを打つて決めます。

ですが、～ド、～ルという字で終わることが多いですね。
個人的に”る”の発音が好きです（聞いてない）

* タイトルズオブウェスペリアTOVにある名前とか出でてきますが、関係ありません。ですが、

異世界でも、もし繋がっていたりしたら・・・。

彼女（元ネタの方）なら、異世界でも商売やってそうだな～、と思つていました。

その女は部下を引き連れ、ミッドガルの門を「ウウウウ」と音を響かせつつ潜っていた。

青く短い髪に、黒いサングラス。動きやすい、パツと見るとシーフのよぶな格好をした彼女は・・・・・退屈していた。

“幸福の市場幹部、ノエル・アガーテ”それが彼女の肩書きである。幸福の市場は、ミッドガルだけでなく、世界でも有数の流通を司る機関である。

W.R.Oとも取引をしている。そのギルドのモットーは
“世界を繋ぐギルド”であること、その為に率先して世の中に無いことをすべし”である。

このモットーに感銘を受け所属する者の半分は「お節介」、もう半分は「変人」で構成されている。
前者が主に“世界を繋ぐ”係り、後者が主に“世の中に無いことをする”係りである。

その中で彼女、ノエル・アガーテは後者の方であると周りから思われている。

幹部の多くは、本拠地で物の流れをコンピューターで分析し指示を出している。

が、ノエルの場合は「現地分析」が基本である。危険が付き纏う“現地入り”は、
基本部下に任せるのが普通なのだが、彼女は「んなの、つまらん」の一言で、部下達と同じ環境で商品の運搬をしたり、商品の流通分析をしたりしていた。

そんな“変人”的なノエルは、最近目立つた刺激がないことに退屈し

ていた。

「～～今日の仕事は、W R O に納品か。つまらないねえ。」

「あ・・・ノえ「姉貴と呼びな」・・・姉貴、そんなところにいたら危ないですよ?」

「・・・じゃあ、安全にしたら」私の指定席でい「気の済むまで居てくださって結構です」・・・ちえ。」

武装トラック、というより戦車に近いようなトラック。そのトラックの屋根に、うつ伏せ状態でノエルはため息をついていた。

パンツという音の数秒後、どす黒い色のカームファング、通称“ヘルガ・ファング”が悲鳴をあげつつ地面に倒れる。硬い皮膚に覆われた額から、ドクドクと液体が流れ、液体に浸つたところの草が枯れていく。

ルイは急いで死体を布で包み、液体を採取し、皮膚を剥がす。血は研究機関に、皮膚は防具屋に提供されるのだろう。しかし、「本当に汚いなあ・・・報酬が高い訳だよ。」

岩に腰掛ながらポツリとルイは呟いた。

朝、起床したルイは手帳グリモアがまだ真っ白なのに気がついた。

文字が埋まらなければ、元の世界に帰れない。

何故文字が埋まらないか考えたが、よく分からなかつた。

とりあえず、生きる為に仕事を探し、珍しく報酬が良いのを見つけてのだが・・・。

これが中々面倒臭いものだつた。

“ヘルガ・ファングの生態を知る為に、2・3体倒し採取する。”

ヘルガ・ファングとは、カームファングの変異種だ。ミッドガル郊外は、土壤汚染がとても酷い。乾いたヘドロや産業廃棄物、石油から出たエネルギーのカス、排気ガス等で自然環境が大きく変わった。その警告か、最近表れたのがモンスターの突然変異種だつた。

ヘルガ・ファング、見た目は黒いだけのファングだが、その血は生物にとつて猛毒、皮膚は大抵の剣では傷がつけられない、むしろ欠ける、といった代物だつた。

これが、街にないことだけが奇跡かもしれない。

報酬は4900ギル。サイフはほつくほくだが、気分はサイアクだ。

そんな状態で食欲も湧く気配が無く、WROから提供された食事をぼくつと眺めていた時、横から視線を感じた。 青髪の女性。

彼女はこの物語のキーパーソンだったに違いない、と私は後で思つたんだよ。

* * * * *

「へえ、じゃあ1人でここまで来たの？中々ワイルドじゃないの」

「まあ、運も良かつたよ。その人いなかつたら、多分こうはなつていなかつただろうし。」

ルイとノエルは楽しそうにおしゃべり、という名の人生論を語つていた。

視線に気がついたルイは、ノエルに話しかけた。どうやらルイの食

事の方が美味しそうに見えたらしい。W.R.Oの食事は来た順番に種類が違つたりする（サラダのドレッシングが違う等の程度だが）ので、嫌いなモノに当たつたらしいノエルは、羨ましそうに隣を見ていた、とのことだった。

ノエルはとても聞き上手で、気がついたら色々話してしまった。もちろん、自分が旅人であることも、である。（異世界の、とは言わなかつたが）

それに興味を持つたらしいノエルは、自分は商人で色々な街を回っている。

知りたいことがあつたら、聞いてくれ。と胸を張つて言った。
言葉に甘えて色々と質問をしたら、実用的な事から、かなりマニアニックなことまで教えてくれた。

ノエルは数日間ミッドガルに滞在し、その後カームという街や、アイリンシユテルという所を回り、またミッドガルへ戻つてくるらしい。

“現地入り”かあ、ある意味ノエルも旅人みたいなもんなんだね、しかも商売もしててさ。凄いや

「まあね、つつてもあたしらは所詮商人さ。腕つぶしはそんなに強くない。だから用心棒やトラックに色々武器をつけたりしているのさ。」

「へえ～・・・

「なあ、ルイ。良かつたら護衛の仕事、請けてくれないか？報酬も弾むぜ？何より、あたし、ルイの腕つぶし見てみたいしさ。どう？」「ええ！？でも、うちそんなに強くないし・・・」

「なあに、1人で。とは言わないよ。馴染みの店のやつにも声はかけてあるんだ。そいつも来るから、ルイに大きな負担はかけないさやつてくれないか？と、キラキラ光る視線を横目にルイは考える。

「分かった、良いよ。あ、でも行く前日には声掛けてくれる」と嬉しいな、宿屋の手続きとかしたいし・・・」

「うっし、決まりだな！－ありがと！楽しみになつてきたぜ」
ルンルンという効果音が聞こえそくな程、上機嫌なノエル。

彼女にとってルイという旅人は、「絶好の刺激だつたし、何よりあたしの勘がピンつときたからね。」という発言にもあるように、退屈しきりでもあつたのかもしれない。

～第五章～ 最終幻想の世界・吉兆（後書き）

ちゅうじとメモ。

ノエル・アガーテ・女商人。見た目は凜としている。中身は姉御。

26歳くらい？

幸福の市場・流通を司る集団。ギルドマテリアを日常品にしたのは彼らのお陰でもあるといわれている。

原作キャラに会ひ為の一歩。

次こそは、彼らが出てきます。

（第六章）最終幻想の世界・書（前書き）

先に言つておきます。
まわり道が好きなのです。（え

ノエルの部下であり右腕である男、アロンゾ・バエルはある目的地に向かっていた。

そこは良心的な女店主と、可愛らしい子ども達が営んでいるバー＆飲食店であり、

無愛想な男がやっている、運び屋兼何でも屋の事務所だ。いつも俺はそのバーで食事を済ませつつ、無愛想な方の人物を待つのが習慣だ。

毎日は来れないが、ここでの料理は食べたら忘れられない味だ。この前は新人がお袋の味を思い出したのか、食べながら号泣していた。

“バー・セブンスヘブン”ここが目的地だ。
カラーン、と来店を知らせるベルが鳴る。

「あら、いらっしゃいませ。お久しぶり、もうそんな季節なのね。

黒髪、スタイル抜群、そして美人の店主。
そんな彼女に顔を覚えて貰えるのは、とても嬉しい。
覚えてもらう為に、来るたび同じメニューを注文し続けた俺の努力は報われた、と言つてもいいだろう。

「お久しぶりです、ティファアさん。相変わらず綺麗ですね。
「ふふ、そんなこと言つても何も出せませんよ？」

ああ、毎日来れる男が羨ましいぜ。

毎年、この季節になると仕事を持つて来る人がいる。

仕事内容は、護衛。カームや最近出来たアイリンシユテル等の街を回っている商人の護衛だった。報酬は食事付きで、170000ギル。追加で街に寄った分また報酬が増える。

いい仕事なんだけど、何週間か音信普通になるのが心配よね。。

セブンスヘブンの店主、ティファ・ロックハートは毎年この季節に必ず来る男に、毎年同じメニューを作っていた。

最初、クラウドはこの仕事を受ける気は無かったけど、マリンとティンゼルの学費やお店のことを気にしたのか、結局受けてくれたようだつた。

私がしつかりしていれば。。。

はあ、とため息を吐く私を、心配そうに男 アロンゾが見ている。いけない、いけない。今は仕事中！

「今日はいつもより早く帰つてくると思うわ、運び屋の仕事だったし。」

「そうですか、じゃあ今のうちに。。あ、そつそつ今回はもう一人、護衛が増えるんですよ。」

「へえ、珍しいですね？」

「いきなり『護衛もう1人追加したから!』ってノエルさんが。。あ、でも報酬は減らないんで安心してくださいね!」

ティファが心配そうな顔をしているのを見たアロンゾはそう言つた。が、ティファは違うことを心配していた。

以前、似たような状況になつた時、その人物は無愛想なクラウドに

対し、どうやら腹を立ててしまったらしく軽い乱闘騒ぎになってしまった。

クラウドは攻撃軽くいなし、反撃をしなかつたのだが、逆効果になってしまったたらしい。

「あの、その人ってどんな人ですか？」ティファは尋ねた。

「そうですねえ・・・」

アロンゾは腕を組み答える。

「ノエル、その馴染みの店の人ってどんな人なの？」

「ん？ああ、そいつはね・・・」

ノエルは腕を伸ばしつつ答える。

「波乱万丈な人生送つていてる。マイペースで、大雑把だそうです。世界を救つた英雄。^{ヒーロー}だけば無愛想で無口、プラス根暗。」

数秒後、本人達が同時にくしゃみをしたのは余談である。

あれから2日後、ノエルから連絡が来た。

『明日の午前中に出発するから!』という内容だった。

明日出発なら、今日は仕事じゃなく散策しよう、と思い私はブラブラ歩いていた。

目的地は・・・とある教会だ。

何回か教会が夢に出てきた、そしたら本当に教会があつた。と言つたら友人達は信じてくれるだろ?か?と考えつつ、歩を進める。

寂れた雰囲気を出す教会には、奥に綺麗な花々と泉がある、不思議な空間がある。

とても静かで、澄んでいて、落ち着いて、寂しい。そんなことを感じさせる場所。

こつこつ、と足音を立てつつ泉の場所へ行く。
花達を踏まないようつに注意し、泉を覗き込む。

吸い込まれそ

うだ。

「こんにちは。」

泉の向こうの彼女は、笑顔で言つた。

夢の中にいた彼女が、そこにいた。

『また、会つたね？私の名前、覚えてる？』
彼女は一コツとしながらルイに問いかける。

「エア・・・リス？どうして、ここに？」

『ん～、ここ、私のお気に入りだからかな？

・・・・ルイはさ、どうして自分が異世界を渡つているか。考えた
こと、ある？』

「・・・お気に入り？それに・・異世界の理由、エアリスは・・知
つてているの？」

『知らないの、『ごめんね？』だけど、きっと“ココ”に来たのにも、
理由があるんじゃないかな？こうして、誰かと知り合つことが出来
ることも、ね？“縁”つて言つのかな？』

「“縁”・・・。それって・・・

『私達も“縁”だよね？・・・きっとこうことじやない？』

『いや、さつぱり分からぬよ？・・・・・・』アリス？あれ、消えち
やうの！？』

『出会いは大切に、つてこと。』

あんま理解出来ていないので、エアリス消えちゃつたよ・・・。出会いを大切に・・・ね、確かに普通じゃ出来ない出会いを私は経験している。

良い人悪い人、いっぱい会つたけど、それを大切していこう。
「・・・よおーしつ！元気出てきた、頑張ろう！」

腕を空に掲げて叫ぶルイ。

手帳グリモアは字を書き始めた。

（第六章）最終幻想の世界・書（後書き）

ちょこっとメモ。

アロンゾ・バエル・ティファに一目惚れした男性。ノエルの部下。
赤バンダナが特徴的。

エアリス・ルイの夢に出てきた女性。ちょっとおっちょこちょい。
花のある泉と彼女には何か関係があるのだろうか？

次こそは、次こそは彼をつ・・・。

（第七章）最終幻想の世界・意（前書き）

あけました。今年も頑張ります。

キャラクターの服に関しては、大きな特徴しか書いていません。
と、いうのも私自身が洋服に関してうとい、からです。（え。
なので、洋服に関しては想像して読んで下さると嬉しいです。
原作キャラは、ほぼ原作通りの格好です。

「「」」」」」」」」

バー・セブンスヘブンに、元気のある声が響く。

アロンゾが振り返るとそこには2人の子どもがいた。

少年。

「おかげり、マリン、デンゼル。今日はどうだつた？」
マリン、デンゼルと呼ばれた二人はこっやかに話し出す。

「それがね！ デンゼルつたら、授業中に寝てたのっ！」

?

デングゼルと呼ばれた少年が慌ててくる。さればどうやら本当の事のようだ。

「テングゼル～？ちやんと授業中は起きていないとダメよ？」

怒られた。マリンが言うから……イ元。

「デンゼルがしつかりと授業を受けて、れば、

どうして開くなつたの？

夜更かし、はしていいわよね？

した。

「あのね、テンセルたら……なんでもない！！」
「ん？」

「おーおー、 “おじさん”

だつ！

まさか、そこで自分に触れられると思つてもいなかつたアロンゾは、軽くコーヒーを噴出してしまつた。

ちなみに“バンダナ”は、俺が着けている赤いバンダナのことを言つてゐるらしい。

だからつて、そんなあだ名をつけなくてもいいだろ……。

「で、おじさん。何でここに……って、もしかして仕事の依頼？」
「だから……。……ああ、“何でも屋”にいつもの仕事をな。
「ええ、もうそんな季節? またクラウドと同じく会えなくなる
の? ?」

マリンが不安げに呟く。

「マリン、仕事何だからしようがないだろ?」

デンゼルが腕を組みながら呟つ。

アロンゾが何か言おうとした瞬間、けたたましいエンジン音が店に響いた。

「あークラウドだ!」

マリンとデンゼルが外に飛び出す。店に残つたのは俺とティーファさん。

・・・・つたぐ、心配をせなこよつて一言おいつと呟つたのにな。

アロンゾは一人、心の中で愚痴つていた。

「じめんなさい、二人つたらもう…。」

「あ、いえ。お気になさらずつ

そんなやつとりをしているとカララン、とこう音と、「・・・・・誰だ?」とこう声が

聞こえる。

「・・・・・アロンゾ、だよ・・。」

まつたく、ティファさんみたく、人の名前はしつかり覚えろよ！――

運び屋の仕事を終わらせ帰宅すると、マリンとテンゼルが店から飛び出すのが見えた。

「「おかえり！クラウド！」」

「・・ただいま。マリン、テンゼル。」と言つと、一人が駆け寄つてきた。

右にマリン、左にテンゼルという状態。

・・・・・動けない、困ったな。

クラウド、という青年はしばらくの間、その場所に突つ立てたといつ。

マリンとテンゼルのマシンガン並みの話しへ、相槌を打ちながら店（兼、事務所）に入る。

カラーン、という音の先に赤いバンダナの人物が見えた。

* * * * *

「・・・・・誰だ？」

「・・・・・アロンゾ、だよ・・・」

がっくり、と男がうなだれた。・・・・・ああ、あの

「バンダナ、か。」

「またバンダナ！？またそのネタか！？・・・つて、もういいや！“何でも屋”に仕事の依頼をしに来たんだ。いつもの護衛だ。報酬もいつもの通りだ。」

「・・・そうか、いつ出発なんだ？」

「明日だ。急だが大丈夫そうか？」

「・・・大丈夫だ。場所も前と同じか？」

「ああ、そうだ。」

相変わらず、急だな。と思いつつクラウドは依頼を引き受けた。正直、文句を言つても伝わるような相手がいないのを知つてはいるからだ。

面倒なこと、なりたくない。

「クラウドー！」

「…………マリンか？」

夜、俺の元に、マリンがやってきた。

「これ、お守りに！ デンゼルと一緒に作ったの」

“お守り”というそれは、小さな袋だった。

俺が受け取ると、マリンは「あまり上手くは作れなかつたけど」と言つた。

「袋の中に何か入つてているのか？」

「あ、見ちゃダメ！ おまじないが消えちゃうから！」

袋の中身を見ようとした俺をマリンが止めた。

「…………おまじない」は何か分からぬが、願掛けのようなものだろつか？

「分かつた、見なにようにやる。マリン、有難う。デンゼルにも伝えてくれ。」

わしわし、とマロンの頭を撫でると、えへへ、といつ声が聞こえる。

「もう夜も遅い、ちゃんと寝たほうがいい。・・学校もあるだらつ？」

「うん、分かつた。クラウド、おやすみなさい。」
トタトタ、と足音がして消えていく。
と、同時に人の気配がした。「・・デンゼルか？」

デンゼルが柱の影から出でてくる。

「・・・何で分かるんだよ、クラウド。」

「・・・カン、だな。」「カンって・・・」

軽くうなだれつつ、デンゼルは真っ直ぐ俺を見る。

「クラウド、俺さ・・・バンダナのおっさんに頼んで武器、選んで貰つていいんだ。」

まだ、予定だけど・・・。とデンゼルは心の中で思つた。
本当はすぐにそうして貰いたかったが、アロンゾが了承してくれなかつた。

理由が分からぬ。何故、武器が必要なのか。と問い合わせられた。

デンゼルとマリンは、学校と呼ばれるWROが作つた勉強会に参加している。

ティファアが苦労して参加できるようしてくれた学校だが、留つてゐることとは算数やら科学やら、"今"の状況に役に立ちそつも無い、とデンゼルは感じていた。

"将来の為に"と言われるが、"今"ティファアは毎日苦労して働いているし、クラウドも仕事をしている。

ティファアの店で、マリンのように上手く店を手伝ひこじも出来ない（料理もイマイチ）

デンゼルは、どうしたらこの自分を、この状況を変えられるか悩んでいた。

そんな時だ。WROの学校からの帰宅の祭、短い黒髪の少女を見たのは。

まだ、そんなに自分とも変わらない（よひに見える）少女は、依頼募集窓口、

通称"広場"で、仕事を請けていた。広場で仕事を請けるのは、"旅人"だけだ。

これだ、とデンゼルは思った。旅人は様々な仕事を請けることが出

来る。

その仕事の報酬を貰えればティファ達の負担が軽くなる。

“旅人になりたい”その想いが強くなつていった。

旅人になる為にはまず、ある程度自身を守れる力が無ければならない。

その為に、まずは闘えるように毎日。夜遅くまで特訓をしていたのだ。

「・・・俺、旅人になりたいんだ。」

“クラウドみたいに、世界を回つて仕事して、報酬貰つて、皆を助けたい。守りたい”

デンゼルの決意は固かつた。

「・・・デンゼル」

クラウドが怒つているような、悲しんでいるような眼で俺を見ていた。

「俺は、デンゼル達には楽しい思い出を作つて欲しい、と思つている。

・・・“あの時”とはもう違う、平和な世界になつた、と俺は思つている。

だからこそ、デンゼル達には俺が出来なかつた、色々な事をして欲しい、と。

クラウドはそこまで言つて、少し優しい眼になつた。

「・・・だから俺は、“デンゼルがやりたいこと”が楽しい思い出になるのなら、

・・・俺は反対しない。

「クラウド・・・」

反対される、と思っていた俺は、正直驚いた。

“危ないから辞めろ”といわれると思っていた。

少し、間を置いてクラウドは俺に言った。

「…一つ、言つておく。

武器を持つ、といふことには命を奪う」との責任を持たないといけない。

・・・誰でも傷つけることが出来る。それが、大切なひとでも、だ。デンゼル、お前はその責任をしつかり持てるか?」

「・・・・・」

「もし、その責任をしつかり持てたのなら・・・俺の出来ることをして、

お前の“やつたいたこと”を助けよう。」

そう言つてクラウドは、今日は遅いからまたな、と言つて話を終わらせた。

“責任”か・・・俺は、しばらく考え込んだ。

次の日の朝、クラウドが例の仕事を行つた後、俺宛に手紙が届いた。WROからの手紙で、中身は2泊3日の“外”でのキャンプのやつなもの。

もちろん“外”には魔物がいる、盗賊もいる。一応はWROの護衛もいるが、絶対安全とは言えない。でも、それを上回る魅力が“外”にある。

クラウドの言つ“責任”をちゃんと持てるか分からない、がそれを含めてやつてみたい。とデンゼルは思った。

予定日は2カ月後。その間までに、色々と準備をしないといつ。

そう考へると同時に、デンゼルは言つようの無い高揚感を感じた。

「俺、やつてみるよ。・・・とその前にティファにも言わないとな・・・」

ティファのゲンコツを貰つかも・・・と考えたデンゼルは、最終難関であるうティファに

どうやつて説得をしたらよいか。デンゼルはまた、頭を悩ませるこ

（第七章）最終幻想の世界・意（後書き）

ちょこっとメモ。

ティファ・ロックハート
セブンスヘブンという、美味しいカクテルと家庭的な料理が人気の
店の店主。

見た目とは裏腹に、かなりの拳法使いらしい・・・？

現在はマリン・デンゼル、クラウドと生活をしている。

クラウド・ストライフ

ティファの店の場所を借りて、何でも屋と運び屋の仕事を受け持つ
ている。

仕事の受容が多い為、店に帰つてこないこともしばしば。
ティファとは幼馴染であり、大切な人。
だが、恋人というわけではないらしい。

マリン

ティファ達と一緒に暮らしている少女。

将来はティファの店と一緒に切り盛りしたいと思つていて。

デンゼル

ティファ達と一緒に暮らしている少年。
マリンと一緒に学校に通つていたが、最近悩みがあった。
クラウドに対して憧れが強い。

今回は原作キャラサイドです。

デンゼルの言う”旅人”は、何でも出来る人、に近いです。
デンゼルは、親を失い、育て親も失い、病気にかかり。ある意味壮
絶ですよね。

クラウドも壮絶・・・というよりも、FF7の住人は皆そんな感じ
ですね。

次回はやっとルイとクラウドが会う、ハズ。（え

♪第八章♪ 最終幻想の世界・出会い（前書き）

宣言、チョコボとモーグリの可愛さは鉄壁。
実際に私は鳥、好きです。鶯わしとか鷹たかとか鳩ふくろうとか。
もふもふしたいです。

そんな発言は置いて、今回はようやく出会います。
次の世界までの道のりは長いなあ・・・。（え

武器よし、マテリアよし、携帯食料に…。

「…」
「これから何週間か護衛の仕事をする、忘れ物は一大事だ。

「よーし、これでオッケーかな？…あ、あと手帳はつと…
ぱんぱん、とそれの存在を確認する。この旅で一番田に失くしては
いけないものだ。

トントン、と階段を下りると「よお、ルイ！」「あ、ルイさん！今
日、飲み会するんすよ！」

と、ここに住人達が声を掛けってきた。

「おはようー。」ルイも挨拶を交わす。

「悪いけど、今日から何週間か仕事です。外に行つて来るんだよ
“仕事の為に何週間か空けます”とフロントにある名簿にメッセージー
ジを書く。

これで、帰つてきたら寝るとこが無いー…といつことは無くなるだ
ろう。

「外か…。ずいぶんと懐かしい響きじゃ。」

住人の中で“長老”というあだ名がつく老人がつぶやく。

「あ、長老ーおはよう！」やこます。長老は外に行つたことがあるの
ですか？」

「昔、にな。若い頃、兵士として外に出てたのじゃ。まあ、補給部
隊だったがの」

ほほつと笑う老人。

「ルイや、気をつけて行くのじゃぞ。…そして、自分を大切に、
の。」

そう言つと老人は、懐から黄色のマテリアを取り出した。

「昔使つていたモノじゃが・・・まあ、無によりかはマシじゃろ。

持つていけ」

「わあ！有難う御座います！いかずちのマテリアですね。大切にします。」

黄色く光るそれは、手のひらより少し小さいサイズのモノだった。これでルイは2つ目のマテリアを所持することになった。因みにこれは刀に装着することにした。

「では、行つてきます！」

ルイの声が宿に響いた。

「おーい！おーい！おーい！」とノエルの声が響く。

横にいるのは・・・ノエルの部下の人かな？1、2、・・・4人。

「うつし、おいお前ら、この子があたしがスカウトした子だ。名前は・・・」

「初めまして、ルイ・スズシロです。宜しくお願ひします。」

よろしくなー！という声があちらこちらから聞こえる。

良かつた、結構フレンドリーな感じだ。

ほつとしていると、何かのエンジン音が近づいてきた。

「お、来たな。・・紹介するぜ、ルイ。コイツが前に言つてたやつだ。」

「お、おい、クラウド。アロンゾが言つてたやつはこの子だ。」

「あ、初めまして、ルイ・スズシロです。宜しくお願ひします。」

挨拶をすると、クラウドと呼ばれた男の人は怪訝そうな顔をして（

「……新しい部下、か？」とノルに囁つた。

「<?」

部下になつた覚えは無いけど・・・ヒルイが考へてゐると、直後隣からノエルの叫び声が響いた。・・・言い忘れ、らしい。しばし、ぼつとノエルとアロンゾの喧嘩（一方的な感じに見えるけど）を見ていると、上から視線を感じた。

・・・・背、高いなあ。（私は160いつてない・・。）（

いいなあ、綺麗な金髪。とか、外国人みたいだとか思つていると、

「・・・クラウド・ストライフだ。運び屋と何でも屋をやつている。

「はないな」

わたわた、トルイがしていると「行くぞ、お前らあ！」という声が
聴こえた。

「え、と改めて、何ごとお願いします。ケトセイさん、」

バイクを轢いて歩いていくクラウドさん。
ん・・?

「どうかで見たよつた・・・。どうだつて?」

集合場所に行くと、以前見かけた人物がいた。

短い黒髪の少女。見た目の歳は、俺よりも若く見える。危険な外にいたことが不思議だ。

クラウドがそんなことを考えていると、女幹部のノエルが話し出した。

ルイ・スズシロ、といつらしい。・・ウータイにいそうな名前だな。さらに、どうやら仕事仲間、みたいだ。バンダナが俺に伝え忘れたらしい。

・・・・・護衛の仕事、だよな。・・鬪えるのか？

そいつは視線に気がついたらしく、向こうも俺を観察し始めた。

・・・・・沈黙が、若干きつい。名前ぐらいは言つておくか。自己紹介をしたのだが、"何でも屋"が凄い、と言われたのは初めてだった。

喧嘩を終えたらしいノエルが、出発宣言している。横には頬が赤くなっているバンダナ（アロンゾ）。・・・・相変わらず過ぎる。

毎回思うが、よくこれで外を出歩けるな、と思つ。

~~~~~

青い空を眺める。今日は快晴だ。

ぐいっと腕を伸ばすルイ。と、同時にトラックが大きく右に揺れる。ルイは移動手段が徒步の為、トラックの荷台に乗せてもらっている。ちなみに前にはトラックといつよりかは、戦車に近い車が走っている。

その横を黒いバイクで並走するクラウドさん。

うわあ・・・。絵になるな。

この世界に免許つてあるのかなあ?と考えていると、さつそく一個田の田的地が見えてきた。

カーム、といつ街だ。

ミシードガルに比べ、カームには穏やかな時間が流れている。

高い城壁は無くなり、代わりにレンガの門が作られた。

城壁が無くなつた為、魔物対策にチヨコボが育てられているのだが、このチヨコボがよく脱走して搜索願が出されたりする。チヨコボを捕まえるのはとても大変で、以前はギサーの野菜が用いられていたが(まあ、それでも大変だつたが)

自然環境が悪くなつた為、ギサーの野菜は希少になつた。その為、現在チヨコボを捕よつとするのは至難の業だ。

普通は、諦めるのだが・・・。

「まあてえ――!捕まつて――!」

クラウドの田の前には、チヨコボとひたすら追いかけつこといつ、かなり強引な手法で捕まえようとしているルイの姿があつた。

叫べば叫ぶだけ疲れるだろ?・・・と、呆れているクラウドの隣に、

クエッと鳴く黄色いチヨコボ。

・・・・もつじょりく掛かりをつけだな、ヒクラウドは思った。

\* \* \* \* \*

ノエル達が仕事をしている間に、何かやれつーと思い、私は仕事を

探していたんだ。

そこで“チョコボの搜索願”を見つけた。

場所も分かっているらしい、なのに何で詰捕まえないのだろう…と考えていたのだけど…

これが、結構大変だつた。

走るスピードが物凄く速いのに、体力もあるらしく追いかけているこつちが疲れる。

飼われているものなので、傷つけるわけにもいかない。

ぜえぜえ、と疲れているルイを尻目に、2匹のチョコボは「もう終わり？」というような視線で見てる。しかも何か楽しそう。くつそー！何か悔しい！

「まあーーー！」鬼짜기再開だーーー！

\*\*\*\*\*

結果、惨敗。うん、趣味・読書の人が張り切っちゃいけないね。地面に寝そべっていると、視界が暗くなつた。

「…・・・何をしてる？」

あー、またチョコボにバカにされたよ…。って

「ありや…」

むくつと起き上がると、やけにチョコボ…ではなく、クラウドさんがいた。

その両隣にチョコボが寄り添つてゐる。

「・・・あ、ああークラウドさんーそのチヨコボ捕まえて下せーー。  
「・・・は？」

そう私が叫ぶとチヨコボ達がまた走つて逃げた。ああ、もうーー。

「・・・依頼、か？」

「そりなんですーつて、こらーー急ブレーキ禁止ーー！」

軽やかなフットワークのチヨコボ。そのスキルが欲しいですよもーー。

しばらくして、クエッという鳴き声の方向を見てみたら、クラウド  
さんの周りで

チヨコボがハミングしてた。

・・・・・。

「私の苦労つて一体・・・。」

どんよりした私に、クラウドさんが声を掛ける。

「チヨコボを後ろから追いかけたらダメだ。余計に逃げるからな。

「・・・・もうちょっと、早く知りたかったテス・・・。」

「すまん。」

そんなやりとりの周りで、一匹のチヨコボがグルグルと楽しそうに  
踊つていた。

旅人メモ。チヨコボは後ろから追いかけると口が暮れる。

## （第八章）最終幻想の世界・出会い（後書き）

ちょいっとメモ。

カーム

ミッドガルに比べ、田舎。チョコボの飼育が盛んに行われており、  
その為か、高い城壁を無くしても魔物が寄り付かない。

ちなみに、最初にカームで育てられたチョコボの名前は”ボコ”だ  
とか。

チョコボに乗りたいです。

自転車感覚で乗ってみたいです。

## 第九章 最終幻想の世界・騒（前書き）

ちょっと空いてしました。

学校の授業中に限って話が浮かびます。あるあるー。（え

\*最近、やつとコーナーページの仕様が分かってきました（遅  
お気に入りに入れて下さった方がいるそうで、ポ・・ポイントが  
つこうとするー！）

この場をお借りして・・・。

ありがとうございますー！頑張りますー（。・・）ノ

## （第九章）最終幻想の世界・騒

黙々とサンドイッチを食べるルイを見つつ、俺もコーヒーを飲んでいた。

あの後、報酬を貰つたルイが“手伝ってくれたお礼に食事を”“馳走する”と言い

別に構わないと言つた俺を軽く無視しながら、近くにあつた店へと連れて行かれた。

そんなに喰つのか？と思つてからあれこれ注文し、今に到る。

「……はあ」。『馳走様でしたっ、と。』

ぱんつと手を合わせるルイ。……儀式か？

視線に気づいたのかルイが不思議そうな顔をしている。

「……あ、これ食べ物に対してもお礼をしているんですよ。“有難う”って。」

「食べ物に対して有難う、か。……あんたことって“それ”は普通なのか？」

「へ？……まあ、普通にやつてますねえ。習慣みたいな感じです。」

「ウータイにありそつた習慣だな。あんたはウータイ出身なのか？」  
「えつと……」

ルイが少し言ひよどむ。……余計なことを聞いたか。

「言えないなら無理に言わなくていい。少し気になつただけだ。」

「……すみません。」

「おーい、二人とも？」ノエルの声が聞こえる。

「ノエル（あいつら）の仕事は終わったようだな。」

「あ、そうみたいですね。行きますか？」

\* \* \* \* \*

“どじょう出身?”とクラウゼさんに聞かれた時はどじょうかと思つた。

以前は“前例”のおかげで理解が早かったけど、ここもそこには限らない。

第一、信じてもらえるかどうか分からない。

ぱつ・・つと手帳が輝く。  
字を書いていたよつだ。  
グリモア

その字は、私には読めない。何語だか分からぬ為だ。  
グリモア  
なので手帳を読まれても、私の素性はバレないだろう、と思つてい  
る。

・・・・別に隠しているつもりも無いんだけどね。

「人に信じてもらうのって、難しいからねえ。」ふう、とため息を吐く。

次の街、アイリンシユテルは近い。

1 罪體として着くたる二

アイリンショテルは、じく最近に出来た街である。  
比較的多くの自然が残つており、貴重な素材や食料も採れる豊かな  
場所だ。

中でもそこで採れるマテリアは純度が高く、高値で取引されている。

その為か、街はいつも売り買いにくる商人と、出稼ぎ、また旅人が  
ごった返している。

いつからか、そこに住み着く人が出でくるようになり、争いが多く  
なった。

そこであるルールが決められた。

そのルールは、“武器の持ち込みは禁止”である。

「ルールに従わないとその街には入れない。だけど、街  
は必ずしも“安全”じゃないのさ。隠して持つていくやつらも多い。  
そこで確実に、安全に取引する為に、こうして護衛を頼む商人が多い。  
あたしらが乗ってきたトラックなら、外はまだ安全だがこの街  
じゃ無意味なさ。あ、そうそう。ついでに正当防衛はありだ、ま  
あやり過ぎないようにな。」

ノエルの話をルイは思い出していた。

今のルイの所持品は、簡単な道具（地図やメモ類）と何とか持込  
を了承して貰つた手帳グリモアという状態だ。

もう一人の護衛のクラウドも、普段から身につけている大剣を持つ  
ていない。

だからと言つて無防備かといわれるとそうでもない。

ルイはマテリアを使わなくとも魔法が使え（隠しているが）、クラ  
ウド自身も体術に精通している。

しいて言つのなら、問題なのは護衛同士がその事実を知らないこと  
である。

「あたし言つたよな？“やり過ぎないよつて”ってなあ？」

効果音を付けるのならぐつたり、という音が聞こえそうな風景がノ  
エルの周りに広がっていた。

その傍りには、氣まずそうにしていのクラウドがいた。

事の発端は、“ルールを守らない旅人”が起こした騒動である。ナイフやマテリアを持った旅人と商人が手を組み、マテリアを強引に奪おうとしたが

そこにルイが居合わせたのだつた。

当然、ルイをそのままにしておく訳にはいかないので、その二人はルイを捕まえた。

ルイはとりあえず人のいる所を避けてから、抵抗するつもりだった。ルイ自身は、着実にこの状況から抜け出す算段をしていたのだが・・・。

その一人の運が悪いのか、ルイが幸運なのか。クラウドがそこに現れたのだった。

クラウドはこの街では武器を持ってない状況のルイを、正直などころ“護衛”の仕事仲間に入れていなかつた。むしろ“護衛の対象”だと考えていた。

その為、拘束されているルイを見た瞬間、無意識に“仕事”に入つてしまつた。

「…大丈夫か？」

「大丈夫です・・。大事、になつていますよ？」

クラウドによつてあつさり撃退された二人は伸びていて、話せそう  
ない。

そこに、謡を聞きつけたノエルがやつてきた。

事の状況を理解したノエルは、面倒くさそうに呟づ。

「またく・・。とりあえず、じつちはじつちの言ひ分を言わない

「ごめん、ノエル。」「…ああ、分かった。」

ところがここで終わらない。ルイとクラウドがそう言つた直後、気絶していたはずの二人のうち、旅人の方がクラウドに襲い掛かつてきた。

気配に気がついたクラウドが、襲ってきた旅人に対し攻撃しようとした時だった。

ばこつ、という音と同時に、ルイの右ストレートが襲ってきた旅人に見事に決まっていた。

「いい加減にしいや！！」という掛け声と共に。  
・・・見事なカウンターだ。とクラウドは感じた。

こうして、先ほどの状況が出来たというわけである。

「本当にいいめんなさい、ノエル。つい・・・いつ・・・いつうど?」「“つい”、じゃないよ。ってか、そんなに強いのに何で最初に抵立しないつうこと

「……大事にならないよう?」  
「……すまん、あんたが闘えるとは思つていなかつた。」

結局、正当防衛が認められ、ノエル達はその後仕事をしていたが、一方でルイは“反省しなさい”ということで、宿で謹慎中だった。つまり、暇であった。

「ごろごろ、とベットで転がっていても、ものの数秒しか経たない。ノエル達が帰ってくるのは夕方、今は午後3時ぐらいだ。

「抜け出す？・・・いやいや、それはだら「また怒られるぞ？」うおうー？」

思わず奇声を発し、さうにベットから転げ落ちてしまったルイ。

「クラウドさん、驚かせないでくださいー！」

「・・・ノックはした。」

「聞こえなければ意味ないですー！」

「そうか。すまん。」

まったく反省していないなチクシヨーと思いつつ、ルイはクラウドの視線の先のモノに気がつく。手帳グリモアだ。さっきの衝撃で落ちたらしい。

「あ、それ私のです。日記みたいなものなんです。」

開いている状態の手帳それをクラウドさんが拾つた。

「・・・・・変わったモノだな。」そう言いつつ手帳を私に渡す。

「確かにそうですね。大切なモノ、です。有難う御座います。」

私は受け取つて礼を言つた。

これが無いと、"帰れない" しなあ。気をつけないと。

大事そうに手帳それをしまるイを、クラウドは静かに見ていた。

## 第九章 最終幻想の世界・騒（後書き）

ちょこつとメモ。

アイリンシユテル

カームから1時間程でつく街。

マテリアの他に、薬草や食材等も集まつてくる、商人の街。

だんだんルイの性格が出てきました。  
まあ、普通の大学生ですか。（え

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6479z/>

---

異世界は以外と身近でした。

2012年1月10日20時58分発行